

中朝国境に J-10 戦闘機が展開

漢和防務評論 20160203 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

北朝鮮の弾道ミサイル発射準備に対して、中国は特使を派遣して中止を求めたことになっていますが、テレビ映像を見ても、本気になって諫めたようには見えませんでした。

中国とすれば自国の利益になるよう状況を利用すればよいので、中国は、日米にとって、現在は全く役に立っていません。逆に密貿易で中国の役人が不当な利益を得ているのではないのでしょうか。

KDR 平可夫香港特電：

KDR は、2015 年に入ってから航空兵第 21 師団が駐屯する延邊の飛行場で J-10 戦闘機を頻繁に見るようになった。2015 年に入ってから数ヶ月の間に延邊に出現した J-10 は、恒久的な配備なのか、機動展開訓練なのかは分からない。航空兵第 21 師団は、主として中朝国境、中露国境防備を担当しているが、装備は旧式で、現在、J-8H 型戦闘機が見られるだけであった。J-8H の 3 個連隊が、それぞれ延邊、チチハル、牡丹江に配備されている。J-10 が正式配備であろうと一時的な展開であろうと、中国空軍は、2015 年に入ってから北朝鮮情勢に対する注意度を高めてきた。上述の 3 個の飛行場には、新型の“第一線整備支援格納庫”の建設は発見できなかった。通常、J-10 戦闘機を含む第 3 世代戦闘機の配備に当たっては、類似した整備支援施設の建設が必要となる。したがって KDR は、第 21 師団に J-10 が配備されたとは断定していない。このような状況が過去になかったわけではない。例えば、中国空軍が高級戦闘機と見なしている JH-7A 戦闘機は、配備される前に必ず“第一線整備支援格納庫”が建設された。しかし済南軍区の航空兵第 5 師団 JH-7A 基地は、まず配備させた後に、整備支援格納庫を建設している。

成都航空機会社は、2015 年に J-10B の生産を開始し、少なくとも 16 機が工場から出荷した。一種の考えられる可能性は、これらの航空機が新たな戦闘機師団の機種更新用に提供されるとするものであり、別の考えられる可能性は、最初の J-10B 新製品グループは、試験飛行訓練センター、或いはすでに J-10A を運用している連隊に充当されるとの説である。後者の場合、すでに使用中の中古の J-10A は新たな連隊に配分されることになる。J-11A の場合、このような機種更新方式が実際に行われた。

瀋陽軍区では、赤峰に駐屯する航空兵第 1 師団のみが真っ先に J-10A に換装された。KDR は奇異に思うのであるが、内蒙古の軍用飛行場の直ぐ近くに最近防空措置を強化する多くの動向が見られた。中露国境から 100 KM 未満のホロンバイル飛行場には、2015 年 5 月、少なくとも 9 機の H-6H 爆撃機の配備が開始された。この地

にすでに少なくとも 2 ヶ月以上駐屯しているところから、機動展開訓練ではないと思われる。2014 年以前に、ここに H-6H が配備された形跡はない。ここに H-6H を配備した目的は何か？不思議である。

冷戦時代、ソ連の戦略爆撃機師団は、UKRAINKA 基地を含め、中ソ国境に近い国境から 100 KM 以内の地に配備された。現在も依然として TU-95SM が駐屯し、USURISK 基地には今も TU-22M3 が駐屯している。

論理的に考えれば、ホロンバイルの H-6H も、延邊の J-10 も朝鮮半島有事への対処である。前者は、中朝国境から 1000 KM、爆撃機としては、不合理な距離とは言えない。冷戦終結後、瀋陽軍区の防衛区域には H-6 の駐屯は見られなかった。ホロンバイルの H-6H は、どの部隊に所属するのか明確でない。

KDR の分析では、別の種類の戦略部署であることを排除していない。それは、日本海への出撃の必要性からである。H-6 が東北地区から出撃し、巡航ミサイル攻撃を行えば、東京を含む大部分の日本の大都市と駐留米軍基地、特に青森県に配備された X バンドレーダー陣地を攻撃できる。このレーダー基地は、中国及び北朝鮮の弾道ミサイルに対処するための基地である。

このように見ると、H-6 及び J-10 がホロンバイル及び延邊に出現したことは、一定の関連性がある。すなわち一旦、H-6 爆撃機が日本及び韓半島の米軍攻撃に用いられた場合、護衛任務は延邊の J-10 に任される。

中国空軍の第 3 世代戦闘機への換装の順番から見ると、21 師団は、最も後回しになっている。2014 年までは、J-7 及び J-8 が主であった。

以上